



発行：ヒッポファミリークラブ広報室
TEL:03-5467-7041
MAIL: kouhou@lexhippo.gr.jp

ヒッポファミリークラブ News Letter 2019 vol. 3

多言語教育を提唱するヒッポファミリークラブから、

多言語の習得や関連する研究、グローバル人材が育つ環境など、さまざまなトピックをお届けします！

- **国際的なスポーツ大会を機に考える、日本の外国語教育の来し方行く末**
- **「グローバル化対応」は英語だけで大丈夫？**
上智大学教授 木村 護郎クリストフ（言語社会学）
- **最初のひとは相手の国のことばで。多言語おもてなしパーソンをご紹介します**
- **11月～12月のインフォメーション（マレーシアの若者たちが続々来日 ほか）**

国際的なスポーツ大会を機に考える、日本の外国語教育の来し方行く末

さまざまなバックグラウンドを持つ多国籍の日本代表チームの活躍が目覚ましいラグビー・ワールドカップ、開催まで300日を切り大会を支えるボランティアの研修が始まった東京五輪。次々と開催される世界的なスポーツイベントがまるで日本の国際化を押し上げているようです。多種多様な人々を迎え入れるためのインフラ整備も急務で、パリアフリーとともに多言語対応についても実感する機会が増えてきました。



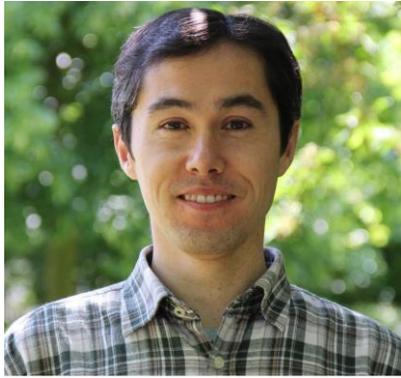
2018年は200を超える国や地域から外国人が日本を訪れ（法務省の出入国管理統計より）、気が付けば身のまわりでは英語以外のことばが飛び交う昨今。学校での多言語教育はどのような状況でしょうか。

文部科学省の調査によると、2018年5月1日現在、英語以外の外国語科目を開設している高校の実数は677校、延べ44,753人の高校生が英語以外の外国語を履修しています。これは全国の高校数の約14%、高校在学者数の約1.4%にあたり、この割合は10年以上ほぼ変化がありません。

一方で2020年春からは学校の英語教育が強化され、それに乗り遅れまいと子どもの英語学習は過熱ぎみの様相を呈しています。インバウンドや外国人労働者の雇用など、日常生活でも外国人との共生社会が進展しています。先入観を持たずに多様な文化や価値観を受け入れることの大切さが問われるなか、実情はやや矛盾しているようにも見えます。

豊かな国際色や多様性を強みに躍進するラグビーの日本代表チーム、史上最大規模のオリンピックとなり、前回のリオデジャネイロ大会を上回る国と地域からアスリートが参加すると見込まれている東京五輪。真の国際化とは何か、スポーツが私たちに教えてくれることは多いようです。近年のオリンピックでは開催都市に残される未来へのレガシー（遺産）にスポットが当たります。東京五輪をきっかけに、私たち日本人の心が世界のさまざまな言語によりいっそう開かれていくことを期待したいと思います。

英語に偏らずさまざまな外国語に目を向けることの意義について、言語社会学の専門家にうかがいました。



「グローバル化対応」は英語だけで大丈夫？

上智大学教授 木村 護郎(クリストフ) (言語社会学)

1974年生まれ。一橋大学大学院言語社会研究科博士課程修了。慶応義塾大学専任講師などを経て、2012年より上智大学外国語学部教授。著書に『節英のすすめ―脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ！』（萬書房）、共編著書に『多言語主義社会に向けて』（くろしお出版）、『媒介言語論を学ぶ人のために』（世界思想社）など。

日本は世界の変化に取り残されつつある。英語ができないから、ではない。ほとんどの人が英語しか学んでいないからである。だから、中国や韓国の人たちが本当のところ何を考えているか、さっぱりわからない。英語を公用語にするインドやフィリピンだって、英語だけでみえるのは表層にすぎない。ロシアも遠い国のまま。中東に至っては、完全に謎。・・・それでもこれまでやってこれたのは、とりあえずアメリカについていけばよかったから。でも、多極化する現在、もはやアメリカ依存ではあまりにもこころもとない。統合と分散が同時進行する世界に伍していくためには、共通語としての英語だけではなく、多言語の現実に向き合うことが求められている。

多言語への感受性が必要なのは、日本に住む一人一人にもあてはまる。コンビニに行くとき外国人が働いている。学校にも他のことばを話す子がいる。職場でもいろいろな背景をもった人と出会う。国内でも国外でも、多様な言語的・文化的背景をもつ人たちと偏見なくつきあっていくことが必須の前提となる。そして相手を知る一つのカギが言語である。相手の言語に関心をもって学ぶことで、相互理解が深まる。もちろん、一人でいくつもの言語を習得するのは限界がある。高度な語学力に到達するのも一部の人に限られるだろう。めざすべきは、一部の専門家だけにまかせるのではなく、社会全体として、異なる言語の異なる能力を持つ人が補い合う「言語分業社会」である。

しかし、こう言うと、必ず、「英語さえできないのに多言語なんてムリ」という反応がかえってくる。しかし、これは的外れである。「多言語を避けているから英語さえできない」のである。むしろ小さい頃から多言語に接していると、多様性に関心した心がはぐくまれ、異言語を学ぶことにおじけつかなくなる。そして何よりも、言語の多様性に慣れることでさらなる言語が覚えやすくなるのである。

ドイツのベルリンには、ドイツ語とパートナー言語を母語とする生徒が原則としてほぼ半数ずつ通い、授業やその他の活動は二言語で行われるヨーロッパ学校という州立の学校のタイプがある。パートナー言語は現在までに、ロシア語やトルコ語を含む9言語に増えた。近年の教育成果調査では、これらの学校の生徒がドイツ語や数学などにおいて一般校の生徒に劣らない学力を獲得しているのみならず、英語の成績が格段によいという結果がでた。中学3年にあたる9年生では、なんと一般校より1年も先を行っていた。しかも、パートナー言語を学ぶという追加的な負担のあるヨーロッパ学校では英語の授業は一般校より2年遅く5年生になってから始まるにもかかわらずだ。この結果については、ヨーロッパ学校には言語に特に関心のある子どもが行くといった可能性を考え合わせなければならない。でも、それをさしひいても明らかなことは、多言語教育が、英語習得の妨げになっていないことである。

人間の頭はコップではないので、一つの言語が入ったら次がもう入らないということはない。むしろ多言語に接する環境がさらなる言語学習を促すのである。

最初のひとは相手の国のことばで。多言語おもてなしパーソンをご紹介します

ヒッポファミリークラブでは、いろいろな立場や年代の人々が仲間たちとともに、それぞれの生活の中で「多言語」に触れることを楽しんでます。子育てに役立てたい、ことばの習得のため、国際交流がしたい、目的はさまざまですが、そのなかには「多言語」をライフワークにいかして輝く人もいます。身のまわりでも英語以外のいろいろな言語が飛び交う今の日本、「多言語」は人生を楽しく豊かにする秘訣のひとつになるかもしれません。

夏の再来を思わせる晴天となった9月のある日、茨城県の筑波山神社で観光ボランティアガイドをする市川洋子さん（56歳、取材当時）を訪ねました。市川さんは団体職員として働きながら、2013年に「つくば観光ボランティアガイド298（事務局：つくば観光コンベンション協会）」に登録し、週末を利用して筑波山神社の常駐ガイドをしています。



筑波山神社の県指定文化財「御神橋」の前で外国人客に境内や筑波山の登山ルートなどを説明する市川洋子さん

日本百名山に名を連ねる筑波山の中腹から山頂に広がる筑波山神社には見どころも多く、週末はハイキングや登山を目的に訪れる人で大変な賑わいとなります。市川さんら観光ボランティアガイドは、来訪者に神社の境内を案内するほか、筑波山地域の歴史や自然、見どころなどを紹介します。

連休ということもありこの日は多数の登山客が筑波山神社を訪れていました。その多くは日本人ですが、ときおり外国人の姿も見かけます。中国、インド、モンゴル、ロシア、スリランカ、パキスタン、アフガニスタンなど、国籍は驚くほどさまざまです。市川さんは道行く人々に笑顔で声をかけながら、相手が外国人とわかると、すぐに英語や中国語で会話を始めます。話しかけられた人は最初は戸惑いながらも次第に打ち解け、市川さんも神社のなかだけでなく筑波山やその周辺の見どころを説明したり記念撮影を手伝ってあげたりと、観光ガイドの本領を発揮します。英語を話さない外国人から、その場で現地の挨拶を覚えてもらうなど、小さな国際交流が生まれるほほましい場面もありました。

詳しい説明は英語になるものの、市川さんはこれまでの多言語活動を通して、中国語、スペイン語、韓国語でも簡単なやりとりができ、ロシア語、ベトナム語、タイ語、インドネシア語、トルコ語などであいさつができるそうです。相手の会話から何語を話しているかを聞き取り、外国人にはなるべくそのことばで話しかけるようにしていると言います。

「その人の国のことばであいさつをすると、やはり、皆さん大変うれしそうにされますし、日本人はあまりしない質問、例えば、梅は自然に生えてきたのか？ などあって、逆に勉強になることも多いです。」と話す市川さん。「つくば市は大学や国の研究機関も多く、そこに来ている外国の方やその家族も多い土地なので、日ごろ参加している多言語活動で培った、『どんな人にも心を開いて接する』という気持ちや、『その人のことばで話すことで相手の心をつかむ』という経験が、少しでも役に立てると嬉しいです。」と、地域に根差した観光ボランティアガイドとしての思いを語ります。

将来の夢は地元の民話を多言語で話すおばあちゃん！

地元の出身と思いきや、生まれ育ちは神奈川県という市川さん。大学入学を機につくばに移り住み、同じ大学に通う旦那様と出会い、人生の半分以上を過ごして来ました。なんと旦那様も同様に観光ボランティアガイドをしています。2人の娘さんを育てるなかで多言語活動に参加するようになり、心を分かちあえる仲間がたくさんできたと言います。今では昨年5月に生まれた初孫も加わり、旦那様とともに三世代で活動を楽しんでいるそうです。

筑波山神社の活動以外にも、地元のコミュニティラジオ番組での外国人へのインタビューや、国際イベントでの外国人の案内など、市川さんにとって多言語をいかした地域貢献はまさにライフワーク。地元つくばへの愛情は、2016年に筑波山地域が日本ジオパークに認定された記念に行われた、ご当地コロッケの一般公募企画で最優秀の「筑波山地域ジオコロッケ大賞」を受賞したエピソードにも表れています。

「ここ（つくば）で生活している証しや生活のなかで身につけた小さな経験が、ほんの少しで良いから他の人の役に立てたらうれしい」と語る市川さん。多言語をいかした観光ボランティアガイドはこれからも続けていくつもりで、退職後はさらに本格的に取り組んでいきたいと考えています。将来の夢は、近所に住むいろいろな国の子どもたちに、地元の民話を多言語で話すおばあちゃんになること。誠実な人柄の中にチャーミングな一面ものぞかせながらこの日一番の笑顔がこぼれました。



筑波山地域ジオコロッケを提供する「CAFE日升庵」にて
<http://nisyouan.com>

11月～12月のインフォメーション

海外からのホームステイ受け入れやグローバル人材を育む多言語教育に関するイベントを開催しています。

多民族の国マレーシアから続々来日、今年も多くの若者が日本の家庭でホームステイを体験します

ヒッポファミリークラブでは、ホームステイによる国際交流の一環として、マレーシアからも毎年多数のホームステイ希望者を受け入れています。多民族・多文化・多言語の国として語られることが多いマレーシア。ゲストの中には敬虔なイスラム教徒も多く、食事やお祈りをはじめとした習慣の違いなど、ともに過ごす日々はゲストだけでなくホストにとっても驚きの体験に満ちています。今年も秋から冬にかけて、多くの若者が来日する予定です。



〈主なホームステイ予定〉

- 10月27日(日)～10月30日(水) 先生と中学生 17名
- 10月30日(水)～11月1日(金) イスラム科学大学の学生 約20名
- 11月25日(月)～12月1日(日) 中学生と高校生 約20名
- 12月10日(火)～12月15日(日) 中学生と高校生 約35人

※上記の予定は諸事情により変更になる場合があります。

外国人高校生、初めて見つけた「日本」を語る。海外高等学校交換留学生による来日後初の報告会

日時：11月24日(日) 10:30～13:00

場所：ヒッポファミリークラブ本部

(東京都渋谷区渋谷2-2-10)

9月から1年間、日本での留学生生活をスタートさせた外国人高校生による来日後初の報告会が行われます。日本に来て間もない15歳から18歳までの若者16人が、母国との違いによる新鮮な驚きや人生初の不思議な体験など、3か月の日本の生活で見つけた「日本」について思い思いに話します。当日は留学生のホームステイ先の家族も参加し、ホストファミリーならではの発見や留学生たちの意外な一面などを伝えます。



タイ、韓国、イタリア、アメリカ、メキシコの留学生たち
1年間の抱負を書いた色紙を持って記念撮影
(8月23日に行われた来日時のオリエンテーションで)

ことばの壁を遊びながら乗り越える！？ 上智大学で多言語の自然習得ワークショップを初開催

日時：12月2日(月) 17:20～19:00 ※参加自由(事前申し込み不要)

場所：上智大学 四谷キャンパス7号館 14階 特別会議室(東京都千代田区紀尾井町7-1)

主催：学校法人上智学院 ダイバーシティ推進室

協力：一般財団法人 言語交流研究所・ヒッポファミリークラブ

コーディネーター：上智大学外国語学部ドイツ語学科 木村 護郎クリストフ教授

人間誰もが生まれながらに持つ、周りの環境にあることばを話す能力。多言語の自然習得に関するワークショップが初めて上智大学で開催されます。コーディネーターは著書「節英のすすめ」で、脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギである、と唱える言語社会学が専門の木村 護郎クリストフ教授。上智大学の学生たちがヒッポファミリークラブの会員とともにさまざまな多言語プログラムを実践します。音楽にあわせたダンスやゲーム、初めて触れることばをまねる活動などを通して、赤ちゃんが自然にことばを話せるようになる過程を疑似体験し、多言語習得のコツを楽しく学びます。当日は事前の申し込み不要でどなたでも参加していただくことが可能です。

上記のイベントは当日のご見学やご取材も可能です。ご希望の際は下記担当までお知らせください

ヒッポファミリークラブ 広報室

TEL:03-5467-7041 (代表電話のため受付は平日9:00～17:30となります。あらかじめご了承ください)

FAX:03-5467-7040 MAIL:kouhou@lexhippo.gr.jp